

材木を担ぎながら 其の九 茶道基本の基 其の参(最終回) 掛け軸の見方

きよ ほうへん
清 方扁

今回は床の間の掛け軸の見方のほんのさわりをご説明します。掛け軸も前回の茶碗と同じく始まり(室町時代初期)は外国の唐絵(宋時代の水墨画)が全盛でしたが、その次に中国の高僧の書や禅語を掛けるのが流行しました。そしてさらに時代が下って一休禅師(あのとんちの一休さんです)が始めたと言われますが、禅語録や漢詩など様々な古典の中から一句を抜き出した「一行書」と言われる掛け軸が多用されるようになりました。

そしてこの流れを確立させたのはいつも出て来ますが、茶聖利休が大きな役割をしました。この流れが現代にまで続いているわけです。どうしても茶道には「利休の前に利休なし、利休の後に利休なし」といったところですかね(今回もどうも話が硬くてつまらないですね)。私は美術史家でも禅僧でもありません。材木屋の老人が茶道を数年習っただけの門外漢で的外れな解説をしていることだけをご承知おき下さい。

さてデパートの茶道具売り場や旅館の掛け軸を観ますと大抵は「一行書」か「水墨画」です。水墨画の場合、テーマはあくまで「冷、凍、寂、枯」という禅の精神に則った主題が基本です。お茶の習慣は禅宗と共に日本に伝来し、その後も茶人の多くが禅僧と深い交流があった事から「茶禅一味」として切っても切れない関係で続いている訳です。そして「一行書」は禅僧、それもその多くは大徳寺(利休がこの寺の三門に自分の像を置いたということで切腹の一因になったお寺)の僧侶の筆になるものが多く、掛け軸の良し悪しは当然、書の巧拙によりますが、実は落款(書き手のサインのようなもの)が重要な意味を持ちます。ここに「紫野」(大徳寺のある住所)とか「大徳寺」の記載があればかなり高価な軸になります。卑近な例で例えればこの書は本店社長の筆になるものということになります。次に「前大徳寺」という記名のある軸があります。この「前」という一字が問題で「前大徳寺」とは一定の位に達した大徳寺派の僧侶が「改衣式」というものを行ない、一日だけ「大徳寺住職」になった証でこの軸は言わば支店長が書いた書ということになります。さらに「大徳寺派」と書いたものであれば、それは大徳寺派所属の僧侶の意味で社員の書ということになります。身分で作品の貴賤は比べられませんが店頭ではこの差は歴然で一桁違う位価格差があります。一度茶道具売り場でご覧になって下さい。ブランドや肩書をありがたがるのはどの世界でも同じですね。

さて一番重要なのは軸の内容です。はたして何が書いてあるんでしょう？全く始めから「読めないよ」とあきらめないでください。私が短い期間ですが色々な場所で一行書の軸を拝見した結果、そんなに多くのパターンはありませんでした。10種類位の軸が判別できればかなりの軸が判読出来ます。受験ではありませんがこれ以外の掛け軸が出てきたら諦めてください。それではここに代表的な一行書を挙げておきます。

意味はご興味があれば私の稚拙な解説よりスマホで検索した方が良〜く解説してくれますのでお調べください。



日々是好日(にちにちこれこうにち)



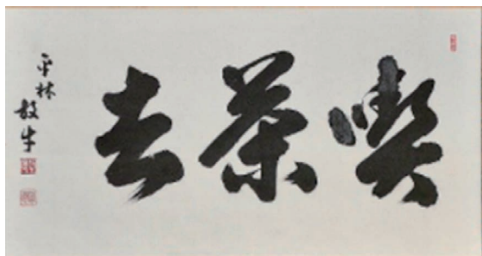
無事は貴人(ぶじこれきにん)



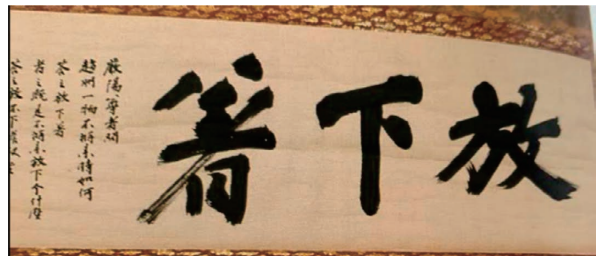
松無右今色(まつにここんのいろなし)



明暦々露堂々(めいれきれきろどうどう)



喫茶去(きっさこ)



放下着(ほうげじゃく)



和敬静寂(わけいせいじやく)



関(かん)



教外別伝不立文字(きょうげべつでんぷりゅうもんじ)



色即是空(しきそくぜくう)

先月号の偽物のお茶碗の答え

④形が全く天目茶碗の体をなしていません。⑥は大量生産の萩焼の茶碗、使い易さでは国宝茶碗より使い易い?かもね。⑧楽茶碗にはこんな具象の絵付けはありません。(ご安心ください。こんな偉そうな事を言えるのも答えを知っているからで知らなければ分かるものではありません。)